

# コルネイユ（二）戀愛

持田坦

今日はコルネイユに於ける愛といふ題でお話することになつてゐるのですけれども、本当はコルネイユといふ作家を口実にして、私がこれ迄愛について考へて来たことをお話する、と云つた方が適當ぢやないかと思ふのです。尤も、自身の愛についての考へを敍べるのには、コルネイユは大變好都合な作家だと云へさうに思ひますので、その意味では安心してコルネイユについて考へてゆけば良いのだと思つてゐます。

そこでコルネイユの愛なのですが、愛と云つても、恋愛、祖国愛、親子の愛、権力愛、神に対する愛、神の人間に対する愛、といふふうに、コルネイユは色々の愛を書いてゐます。さうして、斯うした色々な種類の愛を、コルネイユは、謂はゞ同じ一つの態度で、同じ比重を掛けながら書いてゐます。と云ふのは、つまり、斯うした種々様な愛を、その間に何処か共通したところのあるものとして、——或ひは少くとも互に関連し得る性質のものとして書いてゐるやうに考へられるのです。ですから、今日は先づ「ル・シッド」の主題になつてゐる恋愛についてお話ししようと思ふのですが、このことは必然的にその後続く「オラース」に於ける祖国愛、「シンナ」に於ける権力愛と仁愛、「ポリウクト」に於ける人間の神に対する愛、神の人間に対する愛、などに対するアントロデュクシオンの役目をする事になります。で、これらの色々な種類の愛に対するアントロデュクシオンとして恋愛を撰ぶといふこと、コルネイユの愛の源をル・シッドに見るといふことはどういふ意味を有つかといふことについて、先廻りして一寸触れておいてから、具体的にル・シ

ッドの内容を検討して見ることにしたいと思ひます。

それは、これらの一聯の愛の中で恋愛だけが個と個との關係であつて、その他の愛はみな個と全体、特殊と普通の關係である、といふことです。国に対する国民、親に対する子供、万人を支配する権力に対する野心家、君主に対する臣下、神に対する人間、といづれにしても包摂するものと包摂されるもの、載せるものと載せられるものとの關係にあるものなのですが——さうして、その意味で愛の有無に關係なく初めから相互に依存し合つてゐるものなのですが、恋愛に於ける二人の恋人の關係はさうではなくて、互に独立した男女の間に愛がある場合にのみ二人の間に關係が生ずるのであつて、その意味で此の場合關係とは即ち愛です。同じことを裏から云へば、二人の關係がいつまでも絶えないとすればそれは即ち二人の間の愛がいつまでも絶えないからです。愛が消滅すれば当然元の無關係な状態へ還る訳です。

さうして、現實に二人が結ばれるか否かは二人が相手を愛し合ふことと、それから次に互ひに相手の愛を受け容れ合ふ、といふ二つの手続きが成立するか否かに掛つてゐます。普通の恋愛ではこの二つの手続きは區別されてゐないので、愛し合つてゐて、愛を受け容れ合はないといふのは如何にもナンセンスに聞えますけれども、コルネイユは「ル・シッド」の中でこの二つの手続きをはつきりと引き離し、その間の隔りを極度に、回復の道がない迄に大きくして仕舞ひました。つまり、愛することと愛されることとは違ふのだといふことの證明を、コルネイユは「ル・シッド」の中で徹底的に追求した訳です。ロドリグがシメーヌを愛してゐることなら、誰よりもロドリグ自身が識つてゐる。識つてゐるからこそ彼はシメーヌの父親を殺したのです。殺すことによつてシメーヌから愛されることを拒んだのです。これと全く同様に、シメーヌはロドリグへの愛を自覚するが故にロドリグの裁きを王に要求してロドリグに愛される望みを自分に禁じたのです。このやうな愛することと愛されることが互に矛盾するやうなシチュエーションの発見が「ル・シッド」の劇としての勝利の第一条件となつたのでせうが、又同じことがコルネイユに於ける恋愛の根本的な性格を決定的な形で我々に示してゐると云つて良いのではないかと思ひます。

この二人の恋人が夫々自分の中に相手に対する愛を認め、且一方で、愛とは愛し愛されることではなくて愛することだといふことを認めるならば、彼等はもう愛されぬ故に愛することを止めるわけにいかないのです。たとへどんなに辛くても、苦しくても愛しつづけなければならぬのです。自分の中に愛があることを自分で認めること、これが斯うした愛に於けるすべての振出しです。さうして、これが自分の内を見ること、所謂レフレクション、或ひはアントロソペクションといふものであることは勿論です。だから愛に捕へられるとは取りも直さず、自己に捕へられること、自己の意識から眼が離せなくなることです。これを約めて云へば、愛は自己への目覚めの一つの形式だといふことになりました。さうしてこの時——即ち自分の中に愛してゐる自分を発見する時、自己を精神として自覚することによつて、恋愛の中に於ける自然的な要素、決定論的で運命的な、一度捕へられたらもうどうすることも出来ぬやうな恋愛——ラシーヌの恋愛はさういふ恋愛でせうが——愛のさういふ要素からの超越が実はすでに此処でなされてゐるのだと考へられます。これは愛に於ける自由、即ち自由意志によつて統御され、推進され得るやうな愛を認めることです。換言するならば、愛があること (être) を認めるとき、必然的に愛のあらねばならぬあり方 (devoir être) をも又認めなければなりません。此の場合 *devoir être* とは先に敍べた「愛とは愛し愛されることではなくて愛することだ」といふ言葉がそれに当ります。此の言葉は愛とは愛することだといふ肯定の形と、愛とは愛し愛されることではないといふ否定の形とを含んでゐますから、「愛とは愛することであらねばならぬ」といふ *devoir être* を云ひ表はしてゐるのだと云へる訳です。といふのは、恋愛は愛し愛されることによつて始めて成立つやうな要素を必然的に有つてをり、さうしてこの言葉は愛のさういふ自然的な要素に対する否定であると同時に、意志によつて導かれ得るやうな愛の要素に対する肯定であります。以上を要するにコルネイユに於ける恋愛の根本的特色は、それが意識の光に絶えず照らし出された自意識の一形式としての愛への意識であるといふこと、従つてそれは又意志され得る愛であるといふことです。さうして「ル・シッド」はコルネイユに於ける愛の斯うした根本的性格を初めて明るみに出した作品であつて、此の作品に於いて作者の眼は愛

の現象形態といふよりは寧ろ愛の本質に向けられてゐる、謂はゞ此処には愛の存在学がある、といふ意味でコルネイユが書いたその他の様々な愛はみなこの作品を一方に考へることによつて初めてその意義を充分に理解することが出来るのだと云つて良いのではないかと思ひます。

コルネイユの悲劇はよく愛と義務との葛藤の悲劇だと云はれますが、もしもその場合、愛と義務とが本質的に無関係なものだとするならば、この二つの葛藤がドラマ・アンテリユールを形造る筈はないのです。コルネイユの場合には今申しましたやうに、愛は *être* であると共に、*devoir être* であり、愛は愛であると共に愛でなければならぬのです。つまり愛は義務を含むものであります。

「ル・シッド」の筋を述べておきますと、カステイユ国の王フェルジナンの下にドン・ディエーグといふ老ひた家来がある。これは嘗てはカステイユの国の支へであつた程の武勇の士なのだが今は年老ひて仕舞つてゐる。これにドン・ロドリゲといふ一人の息子がある。一方ドン・ゴメスといふ伯爵があり、シメーヌといふ一人の娘を有つてゐる。伯爵は現在男盛りで、丁度かつてのドン・ディエーグがカステイユの支へであつた如く、今その豪勇によつて国の干城を以つて自他共に許された人物である。さうして彼等の息子と娘、つまりドン・ロドリゲとシメーヌとは相思の仲で、この二人の縁組は今にも公式に成立しようとしてゐる。双方の家柄は申分なし、当の若い二人の立派さは親たちの方で充分に認めてゐる、といった具合で、この結婚については双方とも親と子との間で全然意見の喰違ひがありません。非常に目出度いことです。そして、これが此の劇の出発点です。

幕があきますと、シメーヌの婚約成立直前の喜びと不安の混り合つた言葉があつたあと、ロドリゲの父ドン・ディエーグがシメーヌの父の伯爵に愈々公式に縁組みを申入れるべき宮廷の場で、ドン・ディエーグが王子の師傳に任命されたことに対する名誉心の嫉妬から、伯爵はドン・ディエーグに平手打を喰らはして、その上、劍に手を掛けたドン・ディエーグの劍をたゞき落して引上げます。これで父親同志が一瞬の間に敵同志になつてしまひます。年老ひたドン

・ディエーグにはどうすることも出来ません。彼に残された名誉回復の手段は息子のロドリグだけです。そこで彼はロドリグに復讐を頼みます。ロドリグにとつて親の恥は自分の恥です。しかし自分の恋は自分の恋です。この二つのものの矛盾が彼を絶望につき落しますが、結局、シメーヌの恋人たるものが名誉を失つた人間であつてはならぬことだけは確かです。そこで彼は長いモノローグの中で懊悩を告白しながら、ついに自分を励ましつつ伯爵と果し合ひをする決心をします。

これで第一幕が終り、第二幕に入ると、伯爵が宮廷の一室で、多少自分の血が逸りすぎたことは認めるが今となつては後へは退けぬ、たとへ王の命令でも不名誉な謝罪などしたくない、などと不敵な言葉を洩してゐるところへ青年ロドリグが一人で這入つて来ます。伯爵はここで自分の女婿となる筈であつた青年から身の程知らぬ挑戦の言葉をききます。彼は憐憫を感じますが、挑戦に応じない訳にはいきません。二人は直ちに果し合ひの場所に出掛けます。一方、平手打の一件を聞いて不吉な予感に脅えてゐたシメーヌは、父と恋人が低い声で罵り合ひながら二人きりで出て行つたときいて、いきなり果し合ひの場所へかけ出します。間もなく王のところへ伯爵がロドリグに殺されたといふ報らせが来ます。そこへシメーヌが「お裁きを」と叫びながら走りこんで来ます。するとドン・ディエーグがその跡を追つて来て、「お聴き下さい」と叫びます。恋人を処刑してくれと乞ふシメーヌと、息子が悪いなら自分を罰して呉れと云ふドン・ディエーグとが、王を前にして、今は全く公然の仇敵同志となつて争ひます。王は詮議を約して夫々引取らせませぬ。これが第二幕の最後です。

第三幕になると、場所はシメーヌの館に移り、ロドリグが闇にまぎれて此処に姿を現はします。この不意の出会い、シメーヌを仰天させます。父を殺し、今は全く不倶戴天の仇敵となり、永久に相見ることの出来ぬ筈のロドリグが、自分の家の中で眼の前に現はれたのです。ロドリグを此処に連れて来たのは愛である、がそれにも拘らず、二人は何処迄も敵同志として向ひ合はねばならぬのです。ロドリグは自分の剣をシメーヌに渡して、自分を殺して父の仇を討

つて呉れと乞ひます。今しがた宮廷で、王にロドリグの死刑を要求したあなたが、いま斯うして最も手取早く仇が討てるときになつて躊躇する必要はないだらう、といふロドリグの理窟がシメーヌの恋する心を苦しめます。ロドリグは今はシメーヌにとつて親の仇を立派に取つた勇士であり、讚美の対象にさへなつてゐます。「あなたの名譽のために自分を殺せ」といふロドリグの言葉は彼女を苦しめるための云草に過ぎぬやうに思はれる。併し、彼女がロドリグを殺すことを拒絶するなら、その理由は愛以外のものではあり得ないのであるし、そのことを認めるなら、彼女が王に恋人の処刑を要求した、現に要求しつつある、といふ事實は、意味のない、単なる世間体への配慮に過ぎぬものに見えて来ることを、他処眼には勿論、彼女自身でも認めない訳にはいかぬやうに思はれるのです。ロドリグに殺された父の協腹から流れ出した血が砂の上に書いた義務、ロドリグが自ら立派に手本を示して呉れた父の仇を討つといふ義務——それを果すことによつてのみ、今は完全な恋人となり、天下一の勇者となつて仕舞つたロドリグに相応はしい女になり得るやうな義務、若し彼女が自分のロドリグへの愛を認めるならば、そのやうな義務は意味を失つて霧散してしまふでせうが、同時に又彼女はロドリグのやうな完全無欠な恋人を有つ望みを永久に断念しなければならぬのです。つまり彼女は、愛を認めるにしろ、義務を認めるにしろ、いづれにしても恋人を失はねばならぬのです。さうして彼女は今撰ばねばならぬのです。併し彼女は撰ぶことが出来ないのです。何故なら、どちらを撰ぶにしろ、結果は彼女の衷心の願ひを裏切ることになるからです。そこで彼女は残された唯一の道を撰びます。即ち決断を遅らすことです。シメーヌは到底理窟にならぬやうな理窟でロドリグを去らせます。

シメーヌの館を立去つたロドリグの方もシメーヌに劣らぬ苦悶にもだへてゐます。彼の苦しみはシメーヌの恋人たるに相応はしい者になるためにシメーヌの父を殺したのに、その結果はシメーヌを失ふことになつたからです。彼は、斯うした不条理な運命を理解することが出来ません。彼は父親に向つて絶望と憤懣を告白し、死んでしまひたいとさへ云ひます。父親はそれを宥めて、丁度カステイユに攻めて来たモール人の攻撃にロドリグを向はせます。これが第三

幕の終りです。

第四幕は、モール人を迎へ討つたロドリグが素晴らしい働きをして、一夜にして救国の英雄になつて仕舞つたことを、シメーヌが侍女の口から聞く場面から始まります。シメーヌは侍女の話をきき終ると、父の為の喪服に呼びかけて、自分の愛を抑へ、義務をつくす力を借して呉れと独り言を云ひます。

次いで愈々ロドリグの晴の帰還の場面です。王は有頂天になつてロドリグを褒めちぎります。ロドリグは遜つた受け応へをしてゐます。王の所望によつて彼は戦の模様をくわしく話してきかせます。それがすむと、又もやシメーヌが王に裁きを要求しにやつて来たといふ報らせです。そこで王は、シメーヌの不運な恋を識つてゐますので、ロドリグを退らせ、シメーヌを呼び、喜ぶがよい、ロドリグは大功を樹てたが受けた手傷のために死んだぞ、と云ひますと、シメーヌは顔色を変へて倒れかゝります。〈*Quoi! Rodrigue est donc mort?*〉そこで王は、今は嘘を云つたのだ、併しお前の本当の願ひはよく判つたと云ひますと、シメーヌは忽ち陣容を立て直して、いやさうではなくて、仇が死んだと聞いて喜びのあまり気が遠くなつたのだと弁疏をします。王が、そんな筈はない、今のお前の顔は、判然りと苦痛を表してゐたぞと追求しますと、シメーヌは答へて、それは如何にも苦痛でした、何故ならロドリグが大功を樹て、死んだのなら、それは彼の名誉になるだけで、彼を断頭台の上で死なせたいといふ私の願ひは遂げられなくなるからです、と舌を廻して理窟を捏ねます。王は埒があかぬと見て、自分がロドリグを庇ふのはお前のためだ、よく自分の胸に問ふて見よ、と申しますとシメーヌは怒つて、父を殺した人間を庇ふのが何で私のためになるか、ならぬ証拠に私はロドリグと決闘してロドリグの首を持つて帰つた男の妻になつて見せませうからお允し下さいと云ひます。王はそれを允しません。すると即座に、その場に居たドン・サンシュ——これは以前からシメーヌに恋してゐた男ですが——このドン・サンシュが決闘の役を買つて出ます。王はドン・サンシュでもドン・ロドリグでも、勝つた方に自分みづからシメーヌを引合はせて夫婦の契りをさせてやらうと云ひます。シメーヌは〈*Quoi! Sire, m'imposer une si dure loi!*〉と

叫びます。つまり、ロドリグに勝つた者と結婚すると云つたのであつて、どちらが勝つても勝つた者と結婚すると云つたのではないと抗弁しようとするのですが、王は、若しロドリグが勝つたら文句はないところだらうと云つて取合ひません。ここで幕になります。

最後の第五幕に入ると、ロドリグが又シメーヌの館にやつて来てゐます。この場は手取早く云ふなら、第三幕にあつた二人の出会いの場の繰返しです。ロドリグは今度は殺して呉れとは云ひませんが、その代りドン・サンシュに殺されにゆくと云ひます。さうして、謂はゞ、自分で自分のエレジーを歌つてシメーヌに聴かせます。又もやシメーヌはロドリグの死ぬのを阻止しなければなりません。即ち自分の義務が成就するのを邪魔しなければなりません。併し、今度は彼女の立場は前よりも一層むづかしいものになつてゐます。何故なら、前の時には彼女は結局「殺すのはいやだ」と云ひさへすればよかつたのですが、今度はロドリグの死ぬのを阻止するにはロドリグの考へを変へさせるより他に方法がないからです。シメーヌはここを先途とばかりかき口説きます。あなたの名誉を考へて呉れ、あなたが私の父を殺して私に望みを断つたのは、つまり名誉があなたにとつて私より以上に大切だつたからではないか。それ程大切な名誉が、若しあなたが殺されたら永久に廢れてしまふのです。私の父と闘つた時のあれ程の勇氣は今は今処へ行つて仕舞つたのです。ところが斯ういふシメーヌの懸命の励ましの言葉を聞いてもロドリグは一向に奮ひ立ちません。それどころか、自分が死んだら後の世の人は、シメーヌに対する自分の恋を知り、又シメーヌが自分の首を望んでゐたことを知つて、自分がシメーヌの望みを適へるために死んだのだと云つて呉れるだらう、などと非常にセンチメンタルなことを云ひます。シメーヌは困り果てゝ仕舞ひます。そして遂に最後の言葉を口にします。即ち、あなたが私を愛してゐるなら、私をドン・サンシュから救ひ、私の義務を打挫き、私に沈黙を課するために闘つて下さい。どうか勝つて帰つて下さい。賞品はシメーヌなのです。そして *Adieu! ce mot lâché me fait rougir de honte.* と云つて逃げてゆきます。残つたロドリグは忽ち勇氣百倍して本気でドン・サンシュとたたかふ氣になります。



さうこうしてゐるうちに決闘は行はれ、家で報らせを待つてゐるシメーヌの処へドン・サンシュが血に染つた剣を持つて入つて来ます。シメーヌは恋人が殺されたのだと思つて、のぼせ上つてドン・サンシュを罵り、それから覺悟をきめて宮廷さして駆け出します。王の前に出ると、シメーヌは居並ぶ廷臣たちの前で、自分のロドリグへの愛を打明け、ドン・サンシュとの結婚は免じて呉れと歎願します。しかし此処でドン・サンシュの口から、実は勝つたのはロドリグであつて、ロドリグが勝敗を決めないで置くためにドン・サンシュを殺さずにその劍だけを取上げてシメーヌに捧げさせたのだときかされます。そこへ当のロドリグが這入つて来ます。王女から、シメーヌにロドリグを夫として受入れるやうにと声が掛かります。ロドリグはシメーヌの前に跪づいて、さうしてあなたの氣が済むことなら、この上の如何なる危険、如何なる苦しみでも受けませう。必要なら私の首を取つて下さい。さうして、私の死後、時々はロドリグが死んだのは彼があなたを愛してゐたからだ、と想ひ出して頂ければ結構です、と云ひます。シメーヌはそこで更めて王に向つて自分のロドリグへの愛を認めます。が、今この公の席上で夫婦の契りを結ぶことは、父の血に手を染めるといふ永久の譏りを慮つて御遠慮申上げたいと云ひます。王は答へて、それはやがて時が解決して呉れるだらうから、その時期は限るまいが、きつとロドリグを将来の夫と思へと訓し、ロドリグに向つては、今からモール人の国へ遠征にゆき、手功を樹て、なり得るならばシメーヌにより値するものになつて還つて来るやうに命じますと、ロドリグは固い決意でそれを受け、希望があるのは自分にとつて身に余る幸福だと答へます。

この劇の舞台はカステイユですが、これは絶対的な封建制度の社会です。君主と人民とが實際上の利益によつて結びつけられた一つの有機的な社会の中での出来事です。オクターヴ・ナダルはその意義を忘れてはならぬと云つてゐます。此処では君主に対する忠誠が結局は自分自身を守ることになります。忠義を尽すことは封建制度を維持してゆかうといふ保守的な徳を代表してゐます。つまり、現状維持の努力は徳といふ名で呼ばれます。ここでは、国を維持し、守つてゆくための武力は就中徳の中の最たるものです。だから此のやうな社会は本質上男の社会です。少々の粗暴さや乱棒は

男たる者の徳だと考へられ、*sentiment* を理解することは女々しいと軽蔑されるやうな社会です。斯うしたシュバリエの社会——国家の干城を以つて自ら任じてゐる人間がうよ／＼してゐるやうな社会は、だから本質的に女嫌ひの社会です。女性に対する侮蔑の社会です。そしてこのやうなカステイユの風土は、程度の差はあれ、コルネイユが生きた十七世紀前半のルキ十三世時代の風土であつて、さういふ意味で、当時コルネイユの劇を見た人々は実はそこに当代の社会を見てゐたのだといふランソンの言葉はこの劇についても云へることです。ともかく、ロドリグとシメーヌとの恋愛が生れたのは斯うした風土の中に於いてであつたのです。さうして、此の劇の中で絶えず繰返される *joie* とか *honneur* とかいふやうな言葉は、みな斯うした男が支配する社会を維持し、守つてゆくといふ保守的な方向にむけられてゐるのですが、一方、ロドリグといふ斯うした社会の徳を皆持つた、謂はゞ男性の権力の権化とも云へる男が、この劇の最後にあるやうに、シメーヌといふ一人の女の前に跪いて尊敬と服従とを誓ふならば、それは男性本位の社会を否定して女性本位の社会になるといふ革新的な方向を示してゐるものだと云へるでせうし、又事実、丁度此の頃に貴族のサロンに於いて発生した文化が女性文化であり、これが十七世紀古典主義文学の特色——サンチマンを取上げてそれに出来るだけ論理的な表現を与へるといふ特色を決定したと云つて良いでせう。さういふ十七世紀古典主義文学の第一歩は事実上この「ル・シッド」によつて始まつたのですし、「ル・シッド」は即ち恋愛の発見であつたといふ訳です。実際、ここにはコルネイユといふ一個の人間と、その生きた時代との非常に幸運な、偶然的な一致があります。コルネイユに於ける、つまり彼のビオグラフィに於ける明瞭な発展と呼べるものは、此のル・シッドに始まつたのですが、それと同時に十七世紀古典主義文学が歩き出したのです。つまりコルネイユは時代そのものを生きたのです。併し又、「ル・シッド」に於ける恋愛の自覚が自己の自覚の一つの形式であつたといふことは、必然的に彼がその中に埋もれて生きてゐた時代と彼自身との間に疎隔乖離を引き起します。時代の歴史が自己の歴史であるやうな生き方から、自分にだけ特別な歴史を持つやうな生き方へと抜け出て来ます。つまり時代を抜け出して仕舞ふのです。さうしてこれが「ル・シッド」

によつて彼に啓示された問題に忠実な生き方だったので。が、その結果は時代に取残された流行おくれの作家として惨めな晩年を送らなければならなかつたのです。彼が時代と共に歩み流行作家として認められてゐた時期は「ル・シッド」を書いた一六三六年から五一年の「ニコメード」迄であつて、それから後八二年に死ぬ迄に十二の劇を書いてゐますけれども二度と以前の名声を得ることは出来ませんでした。彼がラシーヌといふ三十三も年下の幸運児を向ふに廻して、その成功に痛めつけられながら老ひの身に鞭打つて劇作を続け、自作が人気を呼ばないのを不思議がりながら一作ごとにエグザマンを書いて自作が規則に当て嵌つてゐるかどうかを綿密に検討してゐることを想へば一種痛ましい気がします。ランソンはさういふコルネイユを *vanité inquiète* と云つてゐます。それは兎も角として、この様な時代から見すてられた晩年が文学史上稀に見る成功を博した此の「ル・シッド」と共に胚胎したといふことは注目されなければなりません。「ル・シッド」は恋愛を神聖視してゐる劇ですが、晩年の作、五二年に書かれた「ペルタリット」以後の諸作では、恋愛は軽蔑されてしまつてゐます。この恋愛の神聖視から恋愛の軽蔑への移りゆきの中にコルネイユのピオグラーフィーがあるのです。恋愛の軽蔑の例を一つ挙げておきますと、「セルトリウス」(六二年)の中でアリスティといふ女王が勇将セルトリウスと結婚しようとして云ふ言葉に次のやうながあります。

Qu'importe de mon coeur, si je sais mon devoir,

Et si mon hymen enfle votre pouvoir?

Vous ravaleriez-vous jusques à la bassesse

D'exiger de ce coeur des marques de tendresse,

Et de les préférer à ce qu'il fait d'effort

Pour braver mon tyran et relever mon sort?

Laissons, Seigneur, laissons pour les petites âmes

Ce commerce rampant de soupirs et de larmes ; (Acte I, Sc. III)

(大意、私が私の義務を知り、又、私達の結婚があなたの権力を増大させるとするなら、私の心など問題ではありません。あなたは私の心に愛情の徴しを求め、その徴しを、私の心が暴君に挑戦し、自分の運を拓かうとして尽す努力よりも大切に思ふほど卑しい男にならうといふのですか。やめませう。殿様、吐息とか恋の焰とかいふ卑しい話題は小人どものために残しておきませう)

斯ういふ具合に恋愛は軽蔑されてしまつてゐますが、これは政治的野心のために——マキヤベリズムのために恋を犠牲にしてゐるのであつて、コルネイユの後期の作品に共通した現象です。さうして、此処で彼は「ル・シッド」によつてそれを否定して出て来た筈の恋愛の軽蔑へ又歸つて来てゐるわけです。これは当時の劇壇の雄であつた *Quinault*

(Philippe, 1635-88) に於いて恋愛が唯一の美德だと考へられてゐるのを考へ合はせると、時代に対して正に逆コースを歩んでゐるわけです。そしてこの逆コースは運命的です。といふのは、「ル・シッド」に於いて恋愛が自然であると共に価値であるといふやうな矛盾として把握されたからこそ、彼はさういふ解けぬ矛盾を、つまり問題を生きなければならなかつた、そしてそれが自分に目覚める自覚の道であつたのですし、又、一度自分自身の問題を忠実に生き始めるならば、必然的に時代から離れ、見捨てられるといふ運命をも覚悟しなければならぬからです。この問題はもつと具体的にお話しなければいけないのですが、時間がありませんので今はこれ位にしておきます。出来るならこの稿の続編でこの發展を辿つてゆく計画です。

話が脇道へそれましたが、今申しましたやうに「ル・シッド」に於けるカステイユといふ舞台によつて表はされる女嫌ひの社会はコルネイユにとつて仲々因縁の深いものなのですが、「ル・シッド」の主人公ロドリグにとつても此の間の事情は同様です。彼が命を賭けてシメーヌに恋するためには、その前に王女のロドリグに対する恋が必要だつたのです。王女の言葉を引用しますと

Elle aime don Rodrigue, et le tient de ma main,

(シメーヌはドン・ロドリグを愛してゐる。彼女はロドリグを私の手から受取つたのだ。ドン・ロドリグは私によつて恋に対する軽蔑の念に打克つたのだ。)

これに抛つて見ますと、ロドリグは初め恋愛を軽蔑してゐたが、王女が二人の仲に立つて呉れたので始めて恋に対する考へを改めて真面目になつてシメーヌに恋し始めたといふわけです。王女がこの封建社会の名誉の象徴であることは云ふ迄ありません。謂はゞ男本位の社会から批准されて出来た恋愛だつたわけです。二人の恋愛が成立するにはこれだけの手間が掛つてゐます。

そして、父親同志が平手打の一件によつて仇敵同志になると子も又仇敵同志になるのは矢張りこの封建的な従の道德によつてさうなるのですが、その場合、恋人が恋人でなくなるのではなくて、恋人同志で居ながら同時に仇敵同志になるのです。これは勿論むづかしいことです。第一幕の最後の場に出て来るロドリグの長いモノローグは斯ういふ困難な愛を引受ける能力が自分にあるかどうかを自問してゐる人間の苦しみの告白です。ここではロドリグは伯爵を殺すべきか否か論理的な結論を出すことが出来ません。併し、それにもかゝらず彼は伯爵を殺す決心をします。何故なら、彼の信ずる道德では決断に迷ふこと自体が男の恥なのです。この気持はシメーヌによつても第三幕で充分に受け入れられ理解されてゐます。しかも、若し復讐を断念するならシメーヌの軽蔑に値する男に成り下ることは受け合ひです。かうして彼は伯爵を殺しに出掛けます。つまり心の愛を失はないために、實際の愛を失ふやうな行為をしに出掛けます。ここで彼は自分の愛を全く憎悪の形で表現しなければならぬやうな場合も有り得ることを事実上認めた訳です。

普通の場合、愛と愛の表現とは一聯のもので、愛し合ふ人間は互に優しい言葉をかけ合ふとか、愛撫し合ふとか、その他何でも心の愛を証明するやうな愛の行為をする。さういふ行為に媒介されて心の愛が深められる。つまり、愛の行為が互ひの愛を育てるといふのが通常の恋愛の姿なのです。愛を動機にした行為は心の愛の証明であるといふのがノ

一マルな愛の姿です。ところが、若し何処から見ても憎悪としか思へない行為に出遭つて、しかもその動機が愛であることを理解しなければならぬとしたらどうでせう。ロドリグが父の伯爵を殺したことによつてシメーヌに負はされた困難はまさにそれだつたのです。いづれにしろ愛を證明する材料は完全に欠けてゐます。あるものは憎しみを證明すべき父を殺されたといふ事実だけです。それでも猶且そこに愛を見ようとするとするならば、それは信ずるより他に仕方がないのです。信ずることによつて愛を在らしめるのです。又或る点から云ふならば欲することによつて在らしめるのだとも云へませう。疑へばいくらでも疑へて切りのないことだから信じなければならぬのです。欲するのだから意志的であり意志される愛であると云へますし、又愛が愛の行為として現に与へられてゐないのだから、それは未來的な愛であると云へるだらうと思ひます。此の時、シメーヌはロドリグの中に、謂はゞ自分の欲するまゝの愛の（或ひは憎悪の）在り方を予想することが出来ます。つまりシメーヌはこの時自由である訳です。このやうな自由はつまるところ、二人の間に愛の證明が存在しないからに他なりません。

ここで一寸想ひ出されることはスタンダールの「バルムの僧院」の終りの方で、ファブリスとクレリアが命を賭けた様々な危険を冒したあとで漸く相見る機会が出来る。そこで二人は毎晩二人きりで会ふわけですが、そのときクレリアの方が以前にマドンナにたてたファブリスに自分の顔を決して見せないといふ誓ひをこの時になつて実行しようとするといふことです。スタンダールは何の説明もしてゐませんが、この恋人に顔を見せないといふ誓ひは非常に意味深く思はれます。二人がこれ迄自分達の愛のために命を賭けて乗越え打克つて来た数々の危険な障碍を想ふならば、——さうして、そのために費された情熱の烈しさを想ふならば、ここで二人が完全な幸福を得ることは当然許されてよいと思はれますのに、クレリアは、恐らく自分自身にも理解し得なかつたであらうと思はれるやうな理由から、ファブリスに自分の顔を見せないといふ誓ひをマドンナにたてて、暗闇の中でばかりファブリスに会ふ。ファブリスが先づ第一にそのことを悩み、ファブリスの悩みを見てクレリアも亦苦しんでゐます。そして彼女は結局この誓ひを守れなかつたために死

んで仕舞ひます。恋人に自分の顔を見せないための暗闇。これは恐らく彼等の愛には愛の證明が存在しない——といふか、むしろ愛の證明が在つてはならぬことの象徴なのだと思はれます。完全に許し合つた二人の間では、顔を見せることがすなはち愛の證しなのですから。逆説的に云へば彼等の純粋な愛の幸福には不幸さへ欠けてゐなかつたのです。又このやうな不幸こそ彼等の愛の幸福の證明であるとも云へるでせう。このやうなものが一般に信ずることによつて成立つ愛の現実に於ける在り方でありませう。

話を元へ戻しますと、今申しましたやうに、シメーヌが、ロドリグが自分の父を殺したといふ行為を愛の行為だと判断したとき、彼女は自由でした。このとき彼女は同時に愛と愛の表現が矛盾するといふことを事実上認めただけです。これと全く同じ事情が引續いてロドリグの方にも起つて来ます。シメーヌが王にロドリグの死刑を要求するといふのがそれです。普通なら憎しみによつて為される等の行為を愛による行為だと判断するには、愛と愛の行為を、——一般的に云へば、内容と形式、本質と存在とをはつきり區別して考へることが出来なければなりません、又愛の本質を問題にする限り、外部にあらはれた行為そのものを不問に附して、即ち無視して斥けて仕舞はなければなりません。

このやうにして、ロドリグはシメーヌの父を殺すといふ全く逆説的な形で愛の行為をする。これはシメーヌにとつては解かねばならぬ謎であり、それに正確な解答を出すためには、先づ自分で自分の解答を信じなければならぬやうな謎なのですが、シメーヌはそれに対して見事な解答を与へた。つまりロドリグの死刑を王に要求するといふ形で、同じ謎をロドリグに投げ返すことによつてです。これは余りにも正確な、又余りにも残酷な解答です。そしてここに二人の間に理解に基く愛が成立つたわけです。若しここに愛の証明があると云ひ得るならば、それは憎しみといふ形による愛の證明ですし、愛の証明はないのだといふなら、確かにさういふものは無いのです。この時からロドリグとシメーヌの恋愛は判然りとプラトニック・ラヴの性格を具へて来ます。

amour platonique といふものは所謂片想ひではありません。そこには互に理解し合ふこと、互に相手の愛を認め合ふ

ことさへあるのです。しかし愛の證明が欠けてゐるのです。つまり愛を證明するやうな行為が不可能なのです。愛の行為が不可能だといふのは、若し愛の證明があるならば判断の自由がないからです。憎悪だと思ふべきものを愛だと思ふには自由意志が必要です。又逆に相手に愛の證明を求めることは何よりも相手の自由への侵害です。

愛といふものを互に所有し合ふことだといふふうに定義して仕舞ひますと、これは取りも直さず相手の自由を奪ふこと、つまり相手の人格を無視することになります。アムール・プラトニックといふものは斯うした愛し合ふことに本質的な矛盾に対して敏感な一つの解答だと云へるでせう。そこには第一に相手の人格に対する深い尊敬の念と、次に自分の愛の肯定、——愛そのものへの敬意——云ひ得るならば愛といふ觀念に対する尊敬があります。コルネイユの劇を一口に愛と義務との相刺であるといふふうにはよく云はれますが、そこには非常に誤られ易い危険があるやうに思はれます。愛と義務とが全然無関係で、違つたオールドルに属するものだとするならば、愛の上に義務といふものが突然天災のやうに振り掛つて来るものと考へなければなりません。愛があるなら義務は立たないし、義務をたてれば愛は消えなければなりません。これでは愛に於ける自由意志といふものは有り得ないわけです。コルネイユの劇の義務といふのは、さうではなくて実は愛の在り方の規定なのです。もつと正確に云ふなら愛の逆説的な在り方を意味するものです。さうして一方、愛と義務と云はれる場合の愛といふ言葉は愛の直接的な在り方を意味してゐます。この二つの愛の在り方の矛盾が劇になつてゐるわけです。恋人の父を殺すといふ行為、恋人の死刑を要求するといふ行為はこの二人の恋人にとつては飽迄愛の行為です。しかも其のやうな愛の行為によつて二人は、現実に於いては対立し合ひ、争ひ合ふといふ形になる。ロドリグとシメーナは夫々愛そのものの本質的な矛盾を悩んでゐる。さうして彼等は自分達の胸の中の内的な矛盾が自分達二人の対立といふ形で現実化されて来るのを眼のあたりに見るのです。外は内の形象化されたものです。さうして二人を結びつける原理である筈の愛を守るために二人は引離されてゐるのです。内は外の抽象化です。例へば第三幕でロドリグとシメーナが向ひ合つて争ふのを我々は見る。我々はこの二人が夫々心の中に持つてゐる矛盾を現



実に見てゐるのです。だから我々は此の劇を正当に内部の劇と呼び得るのです。

そこで概括的に申しますと、すべての愛の證拠（すなはち外的なシイニユ）を輕蔑して仕舞ふことによつて主觀の自由、信ずることの自由を確保し、愛を全然内的なものとして確立し終つたとき、——即ち愛とその行為、内容と形式の絶体的な矛盾を許容したとき——現實に於ける二人の遠く隔つた存在の仕方そのものが愛の保証となります。愛が神聖なものであるだけ二人の間の距離は神聖だといふことになります。別の言葉で云ふなら、愛の最高の形式は別離であるといふことです。この点、この劇の結末は紛れもなくプラトニックな結末です。即ち王は二人の将来を約束させながらロドリグをモール人の国へ發たせてやります。又もやここで別離です。現實に遠い処へ行つて仕舞ふのです。で、これはこの劇の結末ですが、事件そのものは未だ終つてゐません。この終りが無いといふこと、完結出来ないといふことはアムール・プラトニックの大きな特徴だらうと思はれます。よく謂はれる「永遠の愛」といふ言葉もそこを云つたものだらうと思ひます。

大体このやうな愛に決定的な満足がないことは云ふ迄ありません。これは愛を欲するから存在するやうな愛なのであつて、愛されるから存在するやうな愛ではない。むしろ愛の逆説的な在り方を撰択して實際には愛されることを拒んでゐるわけですから愛は代償を受取ることはない。強ひて代償を探すなら、大きな犠牲と苦しみとを払つて漸く純粋に保ち得た愛といふ觀念がそれだと云へるでせう。若し、將來實際の満足が得られさうもないといふ理由で、これ迄支へて来た純粋な愛の觀念を自ら拋棄するなら、それは將來だけでなく過去へ遡つて出発点からの自分達のすべての努力を無意味だつたとして仕舞ふことです。愛の代償がないといふ運命は、自ら愛の逆説的な在り方を自由意志で扱んだときすでに受入れられてゐた筈です。さうした苦しみを自覺的に受入れたが故に成立つた愛であつた筈です。

それなら、自然に忘れて仕舞ふことが出来れば一番世話はない訳ですが、これもさうはうまくゆきません。さうした愛の出発点は愛してゐる自分を発見することにあり、さうしてそれは自分に目覚める自己意識の一形式だといふことは

一番はじめに述べましたが、一方忘れるといふことは、心理学者の Henri Delacour の言葉を引きますと、*「Oublier, c'est d'abord s'oublier.」* (Les grandes formes de la vie mentale, p. 28) (忘れるとは何よりも自己を忘れること) なのです。だから愛を忘れるとき、自己に目覚めることによつてはじめて二人の恋人に開かれた価値の世界全体を忘れ去ることになります。それは自分を無意味の世界に連れ戻すことです。彼等が努力して来たのはこの努力を措いて他には意味がないことに目覚めてゐたからに他なりません。だからこの努力をやめて他の努力に移ることは出来ないわけです。恋人を失つた人間が「すべてを忘れて仕事に一生を捧げます」と云ふ場合、それは恐らく、「この恋だけは忘れないで、それに値するやうに仕事をします」といふ意味でせう。逆に云へば、何かの努力があるかぎり、又努力が全人格にかゝはるものであるかぎり、それはすべて自分の愛と連りを持ち、自分の愛を絶えず思ひ出させるものである筈です。

以上申しましたやうに斯うした一般にアムール・プラトニックと呼ばれる恋愛はその本質上から、終ることを得ず、又忘れ去られることによつて消え去ることもなく、又決定的な満足を得ることもなく、唯そこには全然愛に相反するやうな行為、或ひは現実の生活を絶えず愛に結びつけて考へる——つまり瞬間々に更めて愛を擔ひ直してゆく意志の努力があるだけです。それは発展を有たず唯純化されてゆきます。そしてこのやうな愛に於いて二人の恋人が会つて別れるとき、それは必ず永遠の別離として意識されるでせう。のみならず、二人が会ふといふことが既に多少とも信じ合ふことによつて成立つた愛の純粹さを損ふものである筈です。だから第三幕でロドリゲがシメーヌの館にゐるのを見ることは我々に意外の感を起させます。シメーヌには、それは勿論嘗つて約束されたことのない約束に対する違背行為だと写つた筈です。しかもロドリゲは自分の首を取れと要求します。二人の間ではすべては逆説だとならなければならぬのに、さうしてそのことは既に互に了解済みである筈であるのに、ロドリゲはシメーヌが王にロドリゲの死刑を要求したことだけには逆説を認めないのです。これは正にシメーヌの信頼を裏切るものです。オクターヴ・ナダルはこの場を脅迫の場だと云ひます。シメーヌにとつて、自らロドリゲの首を取ることが出来ない理由は愛以外に有り

得ないので、ロドリグの要求は「私はあなたを愛してゐる」といふ言葉を目あての脅迫であるわけです。シメーヌは遂に「私はあなたを決して憎んでゐません」といふ否定的な形でそのことを云ひ表はします。即ちロドリグは否定的な形で愛の證しを得たわけです。これは逆説によつて成立つ二人の愛そのものにとつての危機です。直説逆説のいづれか一方に決めて仕舞はなければ實際の解決は有り得ないので、決断することは、実は意志に基くこの世界全体の否定、意志そのものの否定になります。

だからこのやうな世界で最も大きな特権を与へられてゐるのは意志であります——ブリュンチエールはコルネイユの劇全体を *glorification de la volonté* だと定義つけてゐます——又そのやうに大きな権能を与へられてゐながら決断を禁じられてゐるとしたら、意志は又一番の被害者だと云へるでせう。謂はゞ意志はここで自分自身を持って余してゐる訳です。第三幕から第五幕にかけて、此の劇が何か衰弱してゆくやうな印象を与へるのは、主人公が目覚まされた意志をもちながら、決断を禁じられてゐる宿命を自覚するからです。そこに我々は意志が自己自身に向つて奏でるエレジーの悲哀を聞いてゐるわけでありませう。

ル・シッドの中で愛が擬人化されてゐるところがあり、これはコルネイユ独特の現象だと考へてよいものなのですが、これは愛といふ觀念が人間から独立して在るといふ考へを準備するものです。併しル・シッドではともかく恋人への忠誠は愛への忠誠を意味してゐるのですが、数年後のポリウクトではこの二つが矛盾する場合が取上げられてゐます。ここでは愛即神です。ル・シッドで人間にとつて殆んど実行不能の愛に迄高められたものが、ポリウクトで神から与へられる愛として送り返されて来るわけです。そのことについては後日に譲り度く思ひます。

#### ouvrages consultés

F. Brunetiere: Histoire de la Littérature française classique (Delagrave)

- G. Lansoh : Corneille (Hachette)
- J. Schlumberger : Plaisir de Corneille (Gallimard)
- E. Cassirer : Descartes, Corneille, Christine de Suède (Vin)
- G. Reynier : Le Cid de Corneille (Mellottée)
- O. Nadal : Le Sentiment de l'amour dans l'oeuvre de Pierre Corneille (Gallimard)
- G. Poulet : Etudes sur le Temps humain (Plon)
- H. Daudin : La Liberté de la Volonté (P. U. F.)
- H. Delacroix : Les grandes Formes de la Vie mentale (P. U. F.)